

吉井川と旭川を つなぐ運河の起点

くらやすがわよいし 倉安川吉井水門



岡山藩の新田開発を最初に行ったのは宇喜多秀家です。彼は宇喜多堤を造り児島湾の陸化を図りましたが、その後本格的な新田開発に着手したのは池田光政です。

光政は早くから新田の開発を不可避のものとして積極的に開発すべきであるとしましたが、最初の藩営新田である倉田新田が完成したのは延宝7年(1679)でした。倉田新田は津田永忠が計画して上申したものを、すでに隠居していた光政が命じて開発した新田で、操山の南側に広がる約300haに倉田・倉益・倉富の三か村がおかれました。この時期藩財政は逼迫しており、普請の費用として主にあてられた社倉米は、永忠の立案建議に基づくもので、光政の長女奈阿子の持参金を借用したものでした。

新田開発とあわせて津田永忠が行ったのが倉安川の開削です。倉安川は倉田新田のかんがいと吉井川・旭川間の連絡のために延宝7年(1679)2月に起工、同年中に完成しました。吉井村(現・岡山市東区吉井)から平井～網浜村(現・岡山市中区平井・網浜)に至るこの水路は、既存の用水路、湖沼などを最大限に利用して繋がれ、一説によれば新規に開削されたのは全長4里余り(約17km)の2割足らずであったと言われています。

倉安川の吉井水門は吉井川からの取水口であるとともに、舟運の起点となります。水位の異なる吉井川と倉安川に船を通すために考案されたのが、吉井川の堤防に花崗岩で堅牢に築かれた水門で、「一の水門」と倉安川側の「二の水門」そしてその間の「高瀬廻し」と呼ばれる船溜まりで構成されています。二つの水門によって水位差の調節を行い通船する閘門式の水門で、船溜まりは出水時の船の退避や検問に使われました。

記録によると、吉井水門は8月頃に竣工したため、10月19日に江戸からの帰途であった藩主光政は対岸の坂根村から乗船して倉安川経由で帰城し、その2日後の21日から一般の高瀬舟の運行が許可されたということです。

吉井水門は昭和48年(1973)から行われた坂根堰改修に伴い、水門としては使われなくなりましたが、石垣や水門などの構造は当時のまま残されており、そのどっしりした石積みから技術の確かさを感じ取ることができます。

■位置図



手前の倉安川吉井水門二の水門の奥が高瀬廻し



倉安川吉井水門船溜まりの奥が二の水門



倉安川吉井水門「一の水門」 堅牢に造られた花崗岩の水門